

変えられたチャンスであった。また会議にProf. Robertson (U. of Missouri at Rolla) やProf. Guthrie (McGill U.) からも参加しており、外国でも電磁力利用に関心を持った冶金系研究者が増えつつあるのを実感した。今後、この流れ

をより大きなものにしていくには、電磁力を利用した新しいプロセスの実現がそろそろ望まれるところである。

(平成5年3月2日受付)

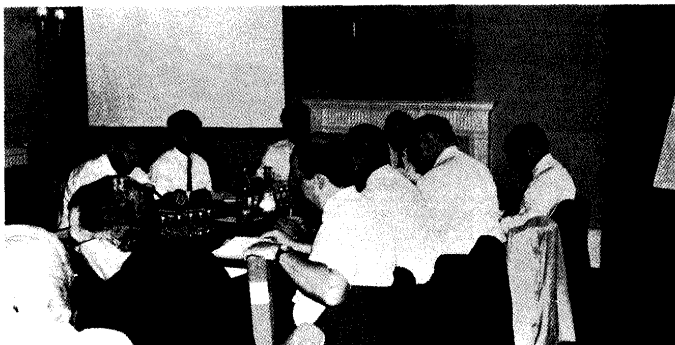


国際鉄鋼分析委員会第1回会議に参加して

佐伯 正夫

新日本製鉄株 技術開発本部

英国スカーバラ市の海を見下ろすホテルでこの会議は始まった。互いに顔見知りの多い出席者同士の雑談が終わり、11ヶ国、2機関の鉄鋼分析のリーダー達による国際会議が初めて開かれようとしている。軽い緊張の下、まず私が口火をきり委員会設立の趣旨、第1回会議の目的などを説明し、出席者の自己紹介、次いで会議議長(開催地英国代表)の選出を行い、彼にバトンタッチしてようやくホッとすると、この会議開催迄の道程が脳裏に駆けめぐった。



会議の雰囲気

国際鉄鋼分析委員会 (ICASI) の設立の経緯

鉄鋼業における分析業務やその運営は各国、各企業で多少の相異はあっても基本的にはほとんど同じであり、管理、技術、標準化などに関する課題も共通な点が多いので、国境を越えた交流を盛んにすべきだという意見が多くの国々の鉄鋼分析のリーダー達にあった。特に、米国、西独、英国など鉄鋼先進国では分析部門の人的資源の欠乏から国内だけの協力体制では活動が不十分となり、その輪を地域(欧州や米州)さらに世界に広げる必要に迫られていた。一方、標準化活動では鉄鋼や鉄鉱石の分析方法の国際規格作りが軌道に乗り、さらにISO9000シリーズ(品質保証)やISO/REMCO(認証標準物質)のガイドの制定に伴い、分析方法のISO規格を具体的に実施する段階となり、分析全体を世界

的に考え基本方針を明確にする上での国際協力体制の樹立が必要となってきた。

このような状況下で、まず具体的な行動を起こしたのはスウェーデンを中心としたノルディック諸国鉄鋼協会の鉄鋼分析委員会、1990年秋に各国に国際的な鉄鋼分析委員会の設立と第1回会議を1991年に持つことを提案した。この時は各国から基本的な賛成は得られたものの委員会の内容が不明確で、また会議の準備も整わずに実現しなかった。

1991年6月、『鉄鋼分析技術の進歩』に関する第3回国際会議がルクセンブルクで開催され私も参加した。この時の技術委員会で欧州鉄鋼分析委員会(CETAS)の詳しい内容を知り、私は今後設立すべき国際的な鉄鋼分析委員会はこのCETASを世界に拡張し、それに国際標準化活動の諮問機関的役割も果たすべきであると考え、また集まりやすくするためにISO/TC17(鉄鋼)/SC1(分析)の会議と同時に開催にする案を考えて、ドイツのDr. Staats, オーストラリアのMr. Fleming, スウェーデンのDr. Berglundに話し、彼らの強い同意を得た(特にDr. Staatsとは話がはずみ、この構想の詳細や会の名称などを煮詰めることができた)。

その後、英国はじめ各国のリーダーやISOの鉄鋼関連の分析組織の議長にも呼びかけ、皆の賛成を得て委員会の設立と第1回会議を英国で開くことになった。

日本では、この趣旨や内容また日本が事務局業務を行うことについて、当協会鉄鋼ISO委員会および共同研究会鉄鋼分析部会で承認していただき、協会事務局の柿田和俊氏の精力的な対外活動の御陰でようやくこの委員会が実現したものである。

第1回会議の概要

国際鉄鋼分析委員会(International Committee of Analysts in Iron and Steel Industry, ICASIと略す)の第1回会議の概要は下記のようなものであった。

日時 1992年6月12日(金)10時~17時

場所 英国スカーバラ市 ロイヤルホテル

参加者 委員会 佐伯正夫、幹事 柿田和俊、会議議長
Mr. Jowitt、書記 Mr. Summerhill (英国)

参加国 オーストラリア、中国、フランス、イタリア、
日本、オランダ、スペイン、スウェーデン、英国、米
国 (ASTMおよびAISI代表)

参加組織 ISO/TC17/SC 1 (鉄鋼分析)、ISO/
TC155/SC 3 および SC 4 (Ni および Ni 合金分析)

欠席はドイツおよびISO/TC102/SC 2 (鉄鉱石分析)

主な討論内容

a. ICASIの基本方針と活動内容

素案を検討し、独立組織としてのICASIは鉄鋼業およびこれに関連する国際組織のリーダーから成り、分析者の適格性、分析技術や分析結果の信頼性を高め、また会社経営者への働きかけ、国際活動の方向づけや支援を行うこととした憲章を作成し採択した。

b. 品質保証システム (ISO9000シリーズ) の実施

各国の実施状況を報告した。工場の認証については欧米ではISO9002に基づいた認証が行われており、日本、中国が未だであった。分析所の認定はフランス、オランダ、米国、英国は実施しているが、イタリア、スウェーデン、日本、中国は未だであった。

c. 認証標準物質 (CRM) の国際システム

現在は各国で製造するCRMしかなく、また認証値に対する不信感もあり、将来は国際的に信頼されるCRM製造体制を構築すべきであることを確認し、当面まず現在のCRMに対する問題点をICASIでまとめ、各国の製造者に苦情を言うことにした。

d. ISO分析規格作成の方針

ISO分析規格の作成および使用について討議し、次のような方針を決議した：

イ. ISO規格では基準方法(絶対法)および日常方法(認知された相対法)を作成する

ロ. 日常方法はCRMを通じて基準方法に遡及できる

ハ. CRMの認証値を求める分析には基準方法を使う

ニ. 係争分析では基準方法を使う

e. 技術開発戦略

技術開発すべき多くの課題があるが、限られたリソースの中でどのように取り上げるべきか意見がまとまらず、まず年2回情報交換をすることにした。

f. 次回

1994年ISO/TC17/SC 1 に合せて日本で開催予定。

今後の活動

第1回会議の決定により事務局(日本)は情報交換の手段としてのICASI Bulletin第1号を12月に発行した。この中には米国からの提案による熟練分析化学技術者確保のためのプログラム設立の考え方などがあり、現在各国の意見を求めているところである。

今後はICASIの活動を通じて鉄鋼認証標準物質や分析技術開発に関する情報や意見の交換も行い、国際的な協力体制を作る予定である。

感想

各国鉄鋼業界の分析リーダーによる初の国際会議であったが、この分野での厳しい現状を開き将来展望を得る目的で、国際協力体制構築にける熱意が感じられ、一日だけの会議ではあったが十分に意見交換ができ、会議は成功で参加者も皆満足していた。

この成功の陰には事務局(日本)や英国の方々の御努力があったのは言うまでもないが、開催地スカーバラの6月の晴天、心地よい初夏の風、眼下にひろがる北海と遠くの岡の古城を背景とした絵のような風景も助けとなっていたようだ。



6月のスカーバラ市

さらに、この会議や第14回ISO/TC17/SC 1 会議などに出席された河村恒夫氏(コベルコ科研)、小野昭紘氏(新日鉄)および大槻孝氏(日本鉄鋼協会)にもいろいろ御助力を頂いたことに感謝しています。

(平成5年3月17日受付)

